

思い出の記

山田 恵子 (恩師 旧姓島仲)

富野校に赴任したのは、昭和 33 年 4 月でした。もう 25 年も前のことです。2 年間の助教諭の後、2 年間退職し再び同一校へ戻り 2 年間で過ごしました。通算 4 年の勤務の中にはいろいろなことがありました。

校長は大浜係佑先生で、筋金入の名校長でした。公的には特に厳しい性格の方で、助教諭の私にとって有難いめぐり合わせだったと思います。何の前触れもなく、教室に入って授業を見て行かれる。それが 5 分や 10 分ならいいが、時には 1 時間も見て行かれる。教材研究も浅く授業の展開にも慣れてない私は、いつも戦々恐々であった。放課後きまって教科書をもって来るように校長に呼ばれる。「今日の指導は自分で何点ぐらいと思うか。」「あの発問のとき、児童の反応はどうであったか。」私の答えは無である。「あんじる発問やるかあ ばぬやらばん、ばがらんゆ。」(あんな発問だったら私だってわからない。)といわれて、泣いて顔が挙げられなかったこともある。また、教育原理を説いてもらったり、参考書を購入して、研修に励むようにと勧められたこともあった。新米の私にとって、ことに将来教職を全うしようと思っていた私にとって、毎日の 1 つ 1 つの言葉が尊い有難い言葉であったと折りにふれ思い出している。

職員に通勤者はなく、日曜の夕方のバスで富野に行き、1 週間勤務して、土曜の午後のバスで 4ヶ字(新川、石垣、大川、登野城)の自宅に帰る。校長は、職員会議に提案されたいことがあると、曜日や時を問わず職員を招集された。それが夕方であったり、日曜の午後であったりした。合図は葉きょうの鐘で 1 点鐘である。私は富野の仲本宅に宿をとっていたが、学校の 1 点鐘は、澄み切った空気をつっ切って部落まではっきりと聞こえた。一点鐘が聞こえると大急ぎで身支度をして学校へ出かけた。会議は夕方遅くまで続き宵闇がせまればランプに灯がともる。そのころから食飲会へと変わる。そこで、思い出話や経験談が交わされ歌がはじまる。歌謡曲、学校唱歌を心ゆくまで歌った楽しい雰囲気になつかしく思い出される。

校区は、東に浦底(当時大田となる)、富野、西に桴海、米原部落があり、教育熱の盛んなところであった。富野には旧桴海の原住民が何軒かあるが、戦火を逃れて東原(富野)に移り住んだそうである。一帯は、肥沃な土地と豊かな水に恵まれ、最適な農業地域である。

1952 年に、政府から強制移住させられた形でこられた方々が、米原、桴海部落をつくってもらったが、お陰で学校の児童が増え、働く場の持てたことは有難き幸せでした。児童生徒数の数は 100 余名で、私が担任したのは 1 年目、1・2 年複式で 22 名。2 年目、1・2 年で 24 名。3 年目は、3・4 年で 27 名。何と 4 年目には、1 年 21 名と 2 年 10 名の 31 名複式を担当していました。職員は校長、中学に男子職員 3 名、小学に男子職員 1 名女子職員 2 名、用務員を入れて総勢 8 名でした。

運動会シーズンになると、太鼓に合わせて、校歌ダンスや行進曲の練習をした。昔ながらの蓄音機で 78 回転の EP 盤、レングのかけらで針をといでの練習である。運動会の当日になると、もっとてんやわんやである。その学年の担任は指揮をしているので、残った者がひとり何役もしなければならない。レコードをかけ、ぜんまいをまわし、次のために針を研ぎながら、その演技が終わるまで緊張であった。

子供の数に比べて校地は広く、グラウンドや周りの草はしばらく刈りないと大変伸びた。分担区を何日かで刈り終わった頃、初めに刈りたところは、もうのびている始末である。校長は環境の美化にも力を入れておられた。グラウンドの東の大きな窪地は初め農場であったが、運動場拡張のため計画的に埋め立てられ、周りの木も切られた。その作業にPTAを動員したのはもちろんだが、児童生徒の労力も多大であった。校庭の南西側の傾斜地の木も切り払われ、その原野にクロトン、カンナ、日日草などが植え込まれ、その花が咲いた時、緑の中で花の色がひととき映え、バスの眺めを楽しませてくれた。

座喜味朝春老人が、富野の東サラ浜の登り口に住んでおられた。沖縄本島の方で教養人であった。水くみに富野の川までこられ、そのついでに学校へ立ち寄られた。自分の作られた野菜を学校職員へと差し入れて下さった。また、アダン葉ぞうりをつくり、児童の室内ばきにと、何十足も提供してもらった。有難い贈り物を子供達は喜んで履いた。その頃沖縄の新聞に写真入りでその記事がのり、学校がクローズアップされたことがある。

当時教育隣組が盛んであった。米原にみどり組、あすなろ組、あけぼの組、富野に竹の子組、朝日組、大田組と6つに分けられた。遠くは男子職員、住宅近くには女子職員が配られた。私は竹の子組の担当で、父母の組長は、宇根一男氏であった。隣組集会の日、夕食をすませて子供達が集会場所（民家）に集まる。集いの歌を歌い、話し合いが始まる。話の内容は、もっと家庭学習をしようということで「本を大きな声で読む。」とか、「漢字計算等の予習復習をしよう。」などであった。その後、レクがあり、終わりの歌となる。今もあの時の子供達目を忘れない。電灯もなく薄明かりのランプの下で顔をつき合わせ、楽しい集いであった。当時の子供達は少なからず、話し合われたことを実行に移していた。4年間の勤務の中でも、3年目に持った男子の中には、ヤマングーが何人もいて、ケンカをしたり、私に反発したりで毎日泣く思いをした。その子供達は今、どこでどうしているのだろうか。たぶん、よき社会人になりよき家庭生活を営んでいるのであろうと思う。

昔から富野（桴海）は、人情豊かな土地で、修学旅行生を迎えるために、おみやげのもちつくり主婦が徹夜したり、旅の客を快く食事をもてなしたりした。また、移住してこられた方々も人なつっこく、勤勉な方達で子弟の教育にもよい影響を与えて下さった。

旧桴海は、私の両親の郷里で、私が生まれて5歳まで育った土地でもある。教職のかけ出しに勤めてさせていただいた富野小中学校が創立30周年を迎えられたことを心からお祝い申し上げます。

子供達が 笑っている
山が笑っている 子供達が 歌っている
川が笑っている お父さんお母さんが拍子とる
空が笑っている 山が 川が 空が 海が
海が笑っている そして学校が 拍子とる
30周年 おめでとう 30周年 おめでとう
富野小中学校の 限りない発展を祈りつつ！

思い出すままに！

知 花 義 信 (元米原出身恩師)

富野小中学校の創立 30 周年にあたり、心からお祝い申し上げます。
学校の施設設備をここまで充実発展させていただいた学校当局、P T A、地域の皆様に心から感謝申し上げます。

本校は昭和 27 年の 4 月に、裏石垣の山の中に 16 坪の瓦ぶきの小屋が建てられ、7 人の児童と 1 人の教師（太田先生）によって、川平小中学校富野分校として悲願の開校式を迎えたのであります。そういう所へ私は、開拓者の子どもを引き連れて勤務することになりました。

1 年生から 4 年生までは太田先生の担当、5 年生から中学 3 年生までは私が担当することになりました。小さな建物で間仕切りもなく、太田先生は西側の黒板を使い東を向いて、私は東側の黒板を使い西を向いて授業する。児童、生徒は背中合わせ、教師 2 人は向かい合わせ、私は教員になって 3 年目、太田先生は 10 年以上のベテラン教師、どうも圧倒されて調子悪い。そこで天気のいい日は、裏のガジュマルの下で授業したことも度々あった。

父兄にお願いし校舎を建ててもらうことになりました。父兄は開拓の疲れを休める間もなく山から木を切り出し 24 坪ほどの茅ぶきの校舎を完成し、それから私は茅葺き校舎で授業をすることができた。私は中学 3 年生を中心に授業を進めた。何しろ入植してすぐ高校受験が待ちかまえているからどうしても中学 3 年生が中心にならざるを得ない。上級生は下級生を教え、下級生は上級生に習うというような方法で授業を進めた。

子ども達は学校から帰れば、木を運ぶなど開拓の手伝いをする。それから予習や復習をする頃には 8 時、9 時になるのは普通である。日曜日といっても休むこともできない。主食である芋の買い出しに行く。個人の物ではなく団体の食糧買い出しである。私は中学生を引率して、山を越えて伊野田部落へ行ったり、川平や崎枝あたりまで行って芋を買い集め馬の背に乗せて運んできて各家庭に配るのである。子供達も大人と同じように疲れていた。ところが受験生の 4 人はよく頑張ってくれた。4 人揃って八重山農林高等学校に入学することができた。

当時は部落から学校までの通学路もなく、山の中、草原を歩いて通学した。子ども達が学校へ着くまでには殆ど毎日のようにびしょぬれになった。途中で深さ 3、40 センチメートル、幅 4、5 メートルほどの小川のような佐久田良川が流れていて、ふだんは子供達のいい遊び場であった。ところが、雨期になると深さ数メートルの激流となり、どこまでが川なのかわからない。子供等が登校する時、何でもなかった川が下校時には渡るに渡れない。家族が迎えに来て川の向こう岸に立ち、子供等は学校側に立って声を掛け合うだけで、また教室にもどり、机を集めて寝る準備をし、富野部落から芋をもらって食べさせた。子供達はおもしろがってはしゃぎたてる。親たちは心配していつ渡れるとも知らない向こう岸に交代々々で立っている姿は暗闇の中にタイムツで確認できる。午後 11 時頃になってようやく干潮になり、海岸から渡った。このようなことは何度かあった。目を閉じて見るとあの時の事が次から次へと色々なことが思い出されてくる。

何を書いたか、まとまりのない文になった。願わくは、創立 30 周年の記念事業を 1 つの飛躍台として、一層充実し、伝統に輝く立派な学校に発展されることを祈りつつ、思い出の記を終わります。

こじんまりしたすばらしい学校

池 城 安 祥 (元恩師)

赴任してまず驚いたのは学校が小さいことだった。

小さな古びた建物が3棟、背後にうっ蒼とした林で、その事が学校をさらに小さく見せた。全校朝礼で並ぶ生徒の少ないこと。前任校が700人余の生徒であったので、富野校の生徒数の少なさには「あれ、これっぼっち？」と、何とも複雑な気持ちになった。

生徒は純朴であった。時折宿舎のホールの柱の陰から、ゴムゾーリを履いた低学年の子どもがこちらのほうを息を殺して見ている。田舎の子どもらしいと思った。自分の子供時代と同じであった。都会ずれしていない子供達を見て、ほっとすると共に涼風が身に吹き抜けるような心地で淡い快感があった。宿舎に入ったその日のうちに、親しく話しかけてくる子供たちがいた。どこにもそういう子供達はいるものだが、そういう子供達は大変ありがたいものだ。未知の土地での不安定な気持ちが徐々に落ち着いてくる。家業はパイン栽培だとか、後の海で魚が釣れるから釣りに行くといいいとか、何々先生は大変面白いひとだとか、話は尽きることを知らない。子供達との話の中で提供される情報は断片的であっても、見知らぬ所に迷い込んだ者の不安が少しずつおさまって行き、すっかり落ち着いてしまうから不思議なものだ。

学校での担当は、中3担任、全学年英語・2、3学年科学・1、2年技術であった。自分の専門だけ教えてきた者にとっては、大きな負担であった。科学は受験勉強の時にやった知識がまだ蓄積されており、少なからず興味があったので問題はなかったが、技術には全くの素人でどうしてよいかわからなかった。当時高校受験の科目は全教科に渡り、そのことでさらに憂鬱になった。技術という科目が心に重くのしかかっていた。生徒のほうは、貧弱な知識、下手な教え方にも何の文句もなく、淡々としていた。自転車の学習などは、自分達で分解・組立てをやっていた。今考えると冷汗ものである。

担任をした中3は、粒揃いの生徒達で女子は2名であった。僅か10名程度の生徒の中から、琉大に2名進学し、短大、専門学校へ進学した者もあり、現在は立派な社会人として活躍している。

地域の教育活動は活発であった。校区をいくつかのブロックに分け、テストの集計などをブロック別にやり、学校通信(校長先生制作)に掲載し、それを持って地域PTAに臨んだものだ。今度はあそこに負けていたが、今回は頑張ろうという風に生徒ならぬ、父兄のほうが熱心であった。折りもおり、教公二法問題が起これり、署名運動をめぐり、父兄と論争したこともあったが、教育熱心なすばらしい人であった。早々と逝ってしまっただけ惜しい人を失ってしまった。

学校を終えて、宿舎での生活は風情があり、一人松尾芭蕉よろしく風流人を決め込み、後の海で貝を拾って食べたり、山に入ってオオタニワタリの新芽を摘んで夕食に添えたりした。俳句を詠じないところは風流人とはほど遠いが、その気になっていれば結構楽しいものである。ヤシガニ狩りにも生徒に連れられて行ったが、雑木林の中を掻き分けながら進むのは一苦勞であった。生徒の中には闇の中にいるヤシガニを小さいライトで、目ざとく見つけ巧みにつかみ取るのがいた。人間は一面で見ていけないという教訓を得た。ヤシガニのことで思い出したが、夜中に大きなヤシガニが宿舎に侵入し、先に照らし出されたそのグロテスクな姿は今持って忘れることができない。

富野校は田園の小さな学校で、都市の汚れがなかった。素朴さが残っていた。生徒達はいわゆる洗練されてはいなかったが明るく純朴であった。何をやるにも全体が1つであった。小さな学校なのですべてがリーダーとして働いた。以前、都市地区の学校の生徒が、安全カミソリを持って校庭の草を刈ろうとしているのを見て苦々しく思ったことがあったが、富野校では一生懸命学校作業に打ち込む姿を見て清々しく感じた。飲酒、喫煙等荒んだ生徒が多い昨今、在任中の富野校の生徒の自然で純朴な姿が鮮やかなコントラストをなして浮かぶ。そのような姿は今も見られるであろうか。勉強の事はほとんど触れなかったが、励まし合い、教え合い、共に頑張ろうという気風が見られた。当時のような姿はずっと続いて欲しいと思う。創立30周年を迎えた富野校の発展をお祈りいたします。

学校のあゆみ

堀 川 モヲシ (富野在住)

昭和 19 年 9 月、台湾に疎開していた。戦争も終わった昭和 21 年にやっと生まれ育った梓海に帰ることができました。帰ってみると、アーラバーリヌー（東原野）には兵隊が家を建て、芋もたくさん植えてありました。私達は芋畑を買うことができましたから食糧の心配はありませんでした。あちこちの畑には、ムイアコン（残りいも）が茂っていましたから、1 人 2 人と次々に越してきて 1、2 軒だった家も人が増え、いつの間にか部落ができました。

その頃といえば、誰もが食べ物に困っていました。金はあっても買うことができない時代でしたから、大浜真賢医者もよくこの部落にこられました。あれは、たしか 2、3 度こられた後の事です。当部落の名前のないのを知り 2 つ考えて下さいました。1 つは浦富で、もう 1 つが富野という名前でした。みんなどれがいいか話し合いました。そして、白保の小浜ウムさんが、「浦富というと、山の浦にあるとても淋しい村のような気がするので富野がいいのではないか。」と言ったのでそれに決まりました。

部落民が多くなると道も学校も必要になってきます。市にお願いして学校も建つことに決まりました。しかし、山また山のこの地のどこに学校を建てたら良いのか検討もつきません。そのうち、今の場所に建てるということになったときは、「はっさよー、あんな山のみにね。」とびっくりしました。何日もかかってブルトラーが来て、山をおして平坦な地を作ってくれたものの、後は自分達でやらなければなりません。毎日、作業、作業の連続でした。切り込みされた材料でしたが、下の海までしか運んでくれなかったのも男も女も裸足で一生懸命運びました。竹やタル木も切ってきました。川平からも青年達が応援に来て下さいました。今もその方達には感謝しています。ありがとうございました。みんなが心をひとつにして働いたお陰で、一軒の学校ができたときは、ゴツゴツした岩の上をハダシで重い木やバラスを背負って歩いたことなど忘れてしまうほど嬉しくなりました。

学校ができ、初めてお見えになったのが大田先生でした。先生は家族を皆引き連れて学校の裏にある小さなかやぶきの家に住みました。食糧もないので、先生の奥さんも山を越え、けわしい道を何時間も歩いて、伊野田まで行って芋を担いでご苦労なさいました。こんな苦しみの中でもみんなはくじけず頑張りました。そして、第一回の運動会を迎えました。賞品は各家で作った物を持ち寄ったものでした。げた・アウダー（モッコ）・なべのふた・アダンバゾウリ等、たくさん出てきて楽しい運動会ができました。

しかし、マラリア・台風・旱魃という災害に会い、にぎやかだった富野もひとり減り、ふたり減りして淋しい村になってしまいました。あの苦しかった頃に、この学校を出られた皆さんも、もう大きくなっておられます。自分の出た学校を忘れないで、お子さんは必ず富野校に出して下さい。富野のような小さな学校でも高校には 100 パーセント合格してきたと思います。

最後になりましたが、大田先生、奥さんいつまでも長生きして富野校の発展をいっしょに祈って下さい。

創立30周年を迎えて

分校第1期生 池原健昌

富野小中学校創立30周年万歳！おめでとうございます。

もう30年経ってしまったのかと思うと、在校当時のことを思い出し、胸にせまるものがあります。

富野校の現在の状況は、残念ながらよく知りません。しかし、創立30周年記念事業の趣意書を読んで見ると、その発展ぶりが垣間見られます。今日ある学校は、歴代の学校長や先生方等の贈物と思われ、今後も止むことなく発展するものと思われま

す。私の最近の仕事に追われ、富野校のことは久しく考えてなかったが、創立30周年事業の趣意書が届き、読んでいるうちに在校当時のことが思い出されて、楽しい思いで書いています。私は、富野分校が川平分校であったときの卒業生です。記念事業期成会の副会長である比嘉次郎さんと同級生です。共に白髪などと悩む年齢になってしまった。在学中の学校は、粗末な小屋という感じの木造瓦葺き教室、木の切り株が残っていた運動場は狭く鉄棒もなかった。学校への通学道は、二人並んで通れず、ジャングルの道のように朝露でズボンが濡れる毎日。また、雨になるとスクダラから渡れず、立ち往生していた。今思うと、めったに得られない体験だったと喜んでいる。また、先生方には教材等不足の中であって、しかも複式学級で学年の違ったものを相手に私どもをよく導いて下さった立派な先生方だったと、常に感謝の念でいっぱいです。

学校生活の中で、大きな思い出となっているものの1つに受験勉強がある。私は、中学3年の2学期に読谷村古堅中学校から転校してきたため、よく春には高校受験となっていた。志望校は、開拓者の子弟ということで、自然に農林高校と決まっていた。受験勉強しなければならないが、参考書らしいものはなく、太田先生が遠く離れた石垣の本屋等から揃えて下さった。また、知花先生は放課後、水田管理用の田小屋を借り受けて指導に当たられた。今のような電灯とてないから石油ランプの灯りをたよっていた。あの頃の夜食が忘れられない。主にソーメンチャンプルーであったが、たまにはフーダに行きうなぎ等を捕り栄養食にしていた。このように親身になって下さった先生方のおかげで、全員合格できた。

今思うと、先生方の指導は日頃から自主独立のできる人間になれる教育であった。教材らしいものが全くない学校を卒業しているが、卒業生は皆切磋琢磨し、今日の母校の30周年に参加しているが、学校に対する愛情の表れだと思います。富野校は今でもそうだと思いますが、恵まれた自然環境にあり、生徒は素朴で純真が保たれている。更に、当時は先におられた富野の方、特に砂川茂太郎さん等の暖かい心遣いもありました。私は仕事柄、那覇市・平良市・名護市等に転居してきたが、富野校の様な環境は少なく、時々富野校を思い出し、心の清涼剤にしています。

創立30周年を迎え、思いつくままに書いて見ました。今後とも、富野校の伝統・校風を発揚され、益々発展することを祈ります。

創立30周年によせて

分校第5期生 上 地 武 俊

「目を閉じて過ぎし30年を懐古する 数々の思い出は過日のごとし 友達と登ったオモト岳の峰々 うっそうと茂る樹海 小鳥のさえずり うだる暑さに蝉時雨 30年の歳月は山野を駆け巡る 嵐になると山の樹が騒ぐ ヒューヒューと音をたてる山風 山の機嫌もかわりやすいへソまで霞に霞む山 子供達は山彦を呼ぶ しかし山は鸚鵡返しの返事だった さらに浜の砂あくまで白くいつも素足の子供達 継ぎ接ぎの服をまとい かばんは風呂敷で小脇に抱えて走る いつも飽きずにイモ弁当 ちょっぴり贅沢してソーミンチャンプルー 皆んな一緒に貧乏した」

1852年 基地要塞化される沖縄本島から琉球政府の計画移民となる。土地を奪われし者への体のよい追い立てにのった。しかし、移民団の想像に絶する苦しみが待ち受けていようとは誰一人知る由もない。移民団は総排水量が僅か50トン、船足も遅く八重山まで2日を要した。ちょうど朝鮮戦争の頃と記憶しているが定かでない。その後、時を経て八重山丸も航行中に時代のため沈没したと聞いて驚いた。

開拓団は運命共同体として意気揚々たるものを感じとった。密林を伐採して開墾する集団作業、毎日過酷なまでの労働に疲労困憊しても笑顔を絶やすことのない大人達、皆んな屈託のない顔だ。しかし意外なことで大騒ぎを引き起こすことになる。マラリアが猛威を振るい始めた。体力を消耗して抵抗力が弱まるとたちまちマラリアに罹患した。媒介するマラリア蚊はヤブ蚊と違い、人間に近づいてきても羽音をたてない、血液を吸う時尻を九〇度に持ち上げる。加速的にマラリア保菌者が続出した。保菌者になるとワラ葺き屋の軒先にその目印がかかげられる。真っ赤な三角旗が風にテンポンと翻っていた。真黄色のキニーネの苦味、皆んなして皮膚の色を黄色にした。

沖縄から持ってきた蓄えも底をつき始める。2～3年は正月を忘れるほど貧困に喘いでいた。いろいろな仕事を手掛ける。道路工事の人夫、炭焼き、薪割、子供等にも労働させて耐乏生活の糧を求めた。食糧の買い出しも難渋した。村中の馬が集められ手綱を取る子供達も一人前の馬丁として認められ嬉しい思いがした。ジャングルを抜け一路川平へと進む。道すがら風光明媚な川平湾に感動を覚える。馬の蹄がザクザクと音を入れると砂にはカニ達が騒ぎまどう。何千万いや何十億ものカニの大群は壮観としかいいようがない。そんな光景を今では目の当たりにすることはない。

ロバのように小さい馬、ラクダの様に強靱な馬、みんなして良く働く。帰途につく頃すっかり日が暮れた。闇夜のジャングルは深々と眠る。夜空の星が一つも見えない樹海。ヒンチャー馬（荒馬）を引く僕はしんがりに追いやられる。細長い一本道のため先頭と後方ではかなり間延びする。ホーホーとフクロウの鳴き声を背に浴びる。いいようのない恐怖を感じて馬の背で目をつむって耐える。すると誰かが大声で悲鳴を上げた。彼は灌木にひっかかって落馬した。

通学路には川があった。その川の名を思い出せないでいる。良く晴れた日はせせらぎでエビを取って遊ぶ。しかし、一度大雨が降ればグングン水嵩を増し濁流が牙をむく。大人が汗して掛けた橋をのみこんだ。そんな時引き潮に合わせて海を渡る。また、学校に泊まるしかない。富野の皆さんが炊き出しのオニギリを配った。その味が今でも忘れられない。

開拓団の入植で、生徒数も増えた。校舎も大人がつくる。児童生徒も一生懸命働く。岩石いっぱい

運動場。ハンマーを振るって石を砕く。モッコ担いで土を運搬する。工事は遅々として進まない。そんな最中の運動会コースは仕上がっても岩山が邪魔をする。走っても生徒が見え隠れする笑えない話もある。

大田先生。誰もが忘れ得ぬ教師として尊敬された。転校して間もない頃、富野校はジャングルの中に一軒の校舎がおいてある形容しがたい光景に唖然とした。しかし、太田先生はそんな辺地校に赴任している。マラリアとジャングルとの戦いに憔悴する人々。貧困に喘ぎ苦しむそんな人々に勇気を与えすさむ気持ちを子弟教育に向けさせた。

知花義信先生も苦勞をしまいこんでいる。想像を絶する苦難の道程であつたに違いない。大田先生、義信先生も指導的立場にあり内面での葛藤は私達が知る由もない。先輩達の進学で両親の説得やら夜を徹する受験指導、文字通り東奔西走している。ワラ葺きの家。どこも手狭で竹で編んだ床。その上をむしろで覆う。ランプの火がゆらゆら照る。勉強に決して満足する環境でない。

良くソーミンチャンプルーに舌鼓をうちながら談笑の間をかいまみる。そのおこぼれにあずかって嬉しかった。

病院に勤務して19年になり人生もすでに半ばにきた。1教室を1人の先生が3学級同時に教える複式授業。生徒の自主性にゆだねられた学習風景、学校行事。後輩の指導と体験的学習が私達を培った。そのすべてが力となってみなぎっている。社会人としてあらゆる試練に立ち向かう勇氣。滅多なことではくじけない精神力。常に先駆者になれ。先生からよく聞かされた言葉で印象に残っている。

自画自賛になるかもしれないが、精神医学的作業療法士の資格を得る為、血のにじむ努力を傾注して難関の国家試験をパスした。これからも恵まれない精神障害者の治療訓練に励みたい。子供の頃大自然に向って冒険につぐ冒険。運命共同体で開拓の意気に燃えた人々。現在農業に勤しむ人々。やむなく離村した人々。皆んなの顔が走馬燈のごとく頭を駆け巡る。寸土に大勢の人達がしがみついて貧乏するより残された人々が大規模農業に転じるほうがより自然かもしれない。

現在も農業に勤しむ米原、富野の皆様は心より敬服します。富野小中学校創立30周年おめでとうございます。

在校中の思い出

独立校第11期生 石井洋子

昨年久しぶりに母校の運動会に参加しました。生徒数が少なく、運動場が広く感じられ、一抹のわびしさを覚えました。

私が在学中の頃は、児童生徒数も100名を超え、休み時間ともなれば、遊び場を求めて走り回り、文字通り遊び場の奪い合いでした。その頃の運動場は、東側には高い傾斜があり、大きな穴も合って現在よりずっと狭かったので少しでも広げようと、窪地へサクダ川から石を運んだり、傾斜地を崩して土入れを行ったものです。

その他、学校給食も始まり、給食用の野菜づくりやバナナ園の手入れに励んだり、活気がありました。当時、一番の楽しみと言えば、バスを借り切って映画を観にシカ（市内）へ出かけることでした。テレビもなく、個人で街へ出かける機会も滅多になかった頃のことですから、文部省推薦の映画が上映されると、学校を挙げて団体見学に出かけるのです。その日は授業も1校時か、2校時で打ち切られるとあって、私達にとっては二重の喜びでした。

何年生の時でしたか忘れてしまいましたが、映画見学があって、その前の日から嬉しくて嬉しくて、勉強も見に入らないくらい楽しみにしていたのに、その当日、私達を乗せたバスが、ヨーンの白保屋農場前で故障してしまいました。修理をするまでそんなに手間取らなかったはずなのに、私達には長く感じられました。

九年前通った母校には数知れず、いろいろな思い出が秘められています。その母校が今年で創立30周年を迎える事に、卒業生の1人として嬉しく思います。

特に富野校が創立された年に、私達同級生は生まれました。ですから、母校の歩みは、私の歩みのように思えて感慨もひとしおでございます。

母校の限りない御発展をお祈り申し上げます。

母校の思い出

独立校第14期生 菊池幸子

富野小中学校30周年おめでとうございます。この非常にめでたい創立30周年記念誌発刊にあたり、原稿を依頼され不安に覚えながらもお祝いさせて頂けることを喜び勇気を出して書くことにしました。

早いもので私が富野校で学び巣立ってやがて12年になります。振り返ると楽しかったことやつらかったことが脳裏をよこぎり、今では楽しい思い出となりまた励みになっています。

小学校入学は、男2人、女6人でした。小さい時から幼なじみ同志で、チームワークもとれて兄弟のような雰囲気と共に学び合ったことを覚えています。

私の住んでいた所は、大田部落です。「大田山林連なりて一」と校歌にもあるように歩けど歩けど畑ばかり。低学年時代はとてつらい道のりでした。当時わが家には自家用車があり、雨の日や遅刻しそうな時は父が部落の生徒を学校まで運んでくれました。父にとっては負担だったと思うが、私にとっては、「雨が降らないかなあ。」とまちどおしくまたどんなにありがたかったことでしょう。

小学校を入学し中学校を卒業するまでの間、私の悩みのひとつは運動会でした。子供心に「逃れたい、隠れたい、雨が降ればいいのに・・・。」とどれだけ願った事でしょう。それにも関わらず晴天に恵まれ毎年盛大な運動会。入学してから卒業するまで「ラスト」という記録は、富野校の歴史に刻まれていることでしょう。当時はあまりにも恥ずかしいことでしたが、運動会を通して勝ち負けよりも何事に対しても最後まで頑張り抜くことの尊さを教わったような気がします。また、中体連主催のバレーボール大会にも出場しました。小規模校だけに、上手、下手関係なく全員が選手でした。仲本英博先生を中心に夜遅くまでかかった厳しい猛練習の結果勝ち取った1勝は「小さくても皆が力を合わせて頑張ったらできる。」という勇気も与えて下さいました。

卒業の年には、志喜屋清先生の指導のもとで力を合わせて池づくりやガジュマルの植樹、そしてアルバムづくり。写真は白黒ですが、他校のアルバムに負けない個性あふれるものが仕上がりました。また制服ほしさに、上原美代子先生に相談すると、気持ちよく相談にのってくれ、冬にはすばらしい制服を着て卒業することができたことは今でもはっきり記憶に残っています。卒業した今振り返ると、当時の先生方の御苦勞が偲ばれ、有難く感じられます。また、高校入試の際には「先輩達の高校入試100パーセント合格」という記録を守ろうとがんばり、私達も全員が合格することができました。

富校校で学び巣立った今、母校は私の誇りです。恩師の先生ありがとうございました。富野校の名が石垣市全域あるいは全県に知られるように、先輩、後輩が手を取り合い頑張っていきましょう。今後とも先生方御指導、ご鞭撻をよろしくお願い致します。この30周年を基にますます富野校が発展していくことを期待します。

【創立 45 周年記念誌】より

創立 45 周年を迎えて

学校長 波 平 長 吉

(第 12 代校長：30 周年誌、45 周年誌編集)

緑輝く於茂登連山を前に、後ろは東支那海の大海原を望み、大自然に囲まれた桴海の大地に建つ本校が 45 周年を迎えました。誠に喜ばしい限りです。

昭和 27 年といえば、琉球政府創立に伴い、資源局八重山支局が設置され、本格的な八重山開拓移住計画が樹立された年であります。

この年の 4 月 1 日、教諭大田正吉氏（八重山群島政府文教部勤務社会教育官兼任指導主事八重山教育研究所嘱託講師）が川平小学校富野分校に発令され、4 月 29 日木造瓦葺平家（16 坪）で開校式、始業式、入学式を挙行したのが本校の創立で今日に至っています。

本校の歴史を顧みますと、明治の末期か大正の初期に石垣尋常小学校川平分校桴海仮教場として始められたが間もなく廃校になります。そこで、児童の教育の必要性を痛感した字民（僅か 18 戸）は、私費を投じて学校組合を組織し、関係当局は桴海仮教場設置を要請するかたわら、四ヶ人水産学校卒業生石垣永元氏を招聘して児童の教育指導をお願いすることにしました。その好学熱心な字民の教育熱は、関係当局に深い感銘を与え、子弟教育愛は高く評価されることとなり、大正 5 年度より桴海仮教場は公立の教育施設として復活し、5 月 17 日島司代理神山寿郎氏（郡視学官）、石垣村長豊川善佐氏、石垣尋常小学校校長坡座真理模氏、駐在巡查吉民吉氏、区長崎山用松氏、訓導伊舎堂遜詳氏の一行を迎えて開校式を挙行し、石垣尋常小学校川平分教場桴海仮教場として再開されます。

その後、大正 7 年 4 月 1 日、石垣尋常小学校川平分教場が独立校となったことから、本仮教場は川平尋常小学校桴海仮教場と改称され、昭和 8 年度まで継続されますが、同年 8 月に大型台風に見舞われ校舎が全壊されたことから、昭和 8 学年度で桴海仮教場は廃校、児童 2 名は川平に下宿通学となり、以来 18 年にわたり児童は川平での不便な下宿通学を余儀なくされてます。

昭和 27 年（1952）年 2 月 25 日に、本校は川平小学校富野分校として八重山群島政府より設立認可され、同年 4 月 29 日、児童数 7 名で現在の校地に開校しました。同年 8 月には、琉球政府の移住計画による桴海地区開拓団（移民）の先遣隊が当地に到着し（先遣隊中に、助教諭知花義信氏、学童 6 名含む）、続いて 10 月、移民の家族が入植（児童生徒 24 名含む）。在籍急増のため 2 部授業の実施を図る中、校舎新築に取りかかり仮校舎 1 棟 2 学級（21 坪）を校区民の奉仕によって建てられ、12 月 1 日には 2 部授業が解消されることとなります。また、入植家族の中には中学生も含まれていたことから、中学校の分校設置を要請していましたが、よく昭和 28 年の 2 月には川平中学校富野分校の設置が認可されることとなります。

当時、住民の殆どは琉球政府の開拓移住計画により、沖縄本島の読谷村や美里村の移住者で、当時の米原部落はうっ蒼としたジャングルに覆われ、風土病のマラリアが横行し、入植して開拓に励んだ苦難の時代であり想像を絶するものがあったことと思います。厳しい自然条件の中にもありながらも、地域住民の教育に対する熱情は幾多の困難を乗り越え、1953（昭和 28）年 3 月 23 日、第一回卒業生（小学生 5 名、中学生 4 名）を送り出すことができます。喜びもつかの間、同年 6 月には、キット台風（大型）に襲われ校舎は倒壊、農作物の被害は筆舌に尽くしがたいものがあったことと思います。しかし、校区民は教育第 1 主義であらゆる艱難辛苦と闘いつつも教育を守り育て、昭和 32 年（1957）年 4 月、石教委第 180 号により川平小中学校富野分校を廃し、独立校となり富野小中学校と改称され、初代校長に大田正吉先生が発令されます。

創立以来、年毎に児童生徒の増加を誇ってきた本校も、昭和40年代に入ると昭和41(1966)年度の在籍数(小学生68名、中学生39名)をピークに、国の農業政策(減反並びにパイン、砂糖等の自由化、観光開発の美名を口実に企業による土地の買い占め)は、農民無視の政策であったことから全国的に農業の衰退が進み、本校区内においても将来を担う若者達が都会へ出て行き、本校の将来に陰りが見えています。

そのような社会情勢の中で、早魃と台風の二重災害を被り苦況に陥った多くの人々は、農業経営の先行きに不安を感じ、企業に土地を手放し村を去って行ったのであります。その結果、本校の児童生徒数は年毎に半減し、昭和61年4月の在籍は、小学校7名、中学校0名に減少し、昭和28年(1953)年2月、川平中学校富野分校と設置認可され、30年余り校区の教育施設として貢献してきた富野中学校は、生徒数の確保に目処がたたないことから廃校となります。

しかし、昭和62年6月には、63年以降72年までの入学予定者が見込まれたことから中学校設置の署名運動を展開し、石垣市教育委員会を始め関係機関に対する要請活動並びに数回に渡る関係機関との懇談の結果、昭和63年4月1日、石垣市立富野中学校として設置認可され再開されることとなります。その後、児童生徒数が増え、平成4年に新校舎並びにランチルームの落成、平成7年には体育館・新築校舎の落成並びに職員室前の庭園の造成、平成9年4月には、これまでの簡易水道から上水道の設置をみるなど、年々学校の施設設備の充実が図られています。尚、これからの情報化社会を考えるとコンピューターの設置等がありますが、県教育委員会の施策等からして、21世紀までにはその整備充実が図られるものと期待しているところです。

このように本校の45周年を顧みますと、校区民は開拓を推進する中で、食料不足、生活物資の欠乏、マラリアの横行、台風による幾度の学校倒壊とその再建等、多事多難の中にありながらも優れた英知と情熱をもって幾多の困難も克服し、茲に45年の校歴を発展継承してこられたのであります。いかなる困難に遭遇しようと、学校教育の重要性の認識にたつて物心両面に渡り、地域の総力を結集し本校を守り育ててきた校区民の子弟教育への情熱に、心から敬意を表するものであります。

最近の学校の様子は、校庭では常に花が咲き、「花と緑は文化のバロメーター」をスローガンに、2年連続の花壇コンクール最優秀賞受賞(石垣市道德教育振興協議会)、石垣はなフェスタ・コンテスト97で石垣市長賞受賞(石垣市観光協会)並びに道路を守る月間運動では感謝状受賞(道路を守る月間沖縄地方推進会議)。英語検定、漢字検定への全児童生徒の挑戦は、殆どの児童生徒が学年相応の学力に近づき、英語検定では3年連続学校努力賞を受賞。教育版画コンクールでは昨年、本年とも在籍(小学校)の半数以上が特選を受賞。常に機会教育を通して指導の徹底を図り、各種コンクール参加での活躍は、学校だより「富野っ子」でご承知おきのことと思います。また、特色ある学校づくりでは、ふるさと学習(地域の歴史・文化・自然への理解を深める学習)を通して、地域や国際社会における共生への理解並びに異文化理解教育を推進しているところです。

ところで、45年の間に、本校の卒業生(平成10年3月現在)は、小学校187名、中学校193名を数え、現在立派な社会人として各分野に置いて活躍されていることは、誠に本校の誇りと名誉でありこれまで本校が果たしてきた役割の大きさに敬服するものであります。この度、45周年の佳節を迎えるに当たり、私たち職員は、児童生徒とともにこの記念すべき年に巡り合った喜びと意義を深くかみしめ、輝かしい歴史と伝統を築いてこられた先輩の偉業に学び、教育に携わるものとして責任の重大さを認識し、21世紀を背負って立つ心身ともに健全な児童生徒の育成に励み、よりよい校風樹立のために全職員の英知を結集して精進すべく、決意を新たにしているところです。

終わりに、本記念誌を発刊するに当たり、関係者の皆様方に寄稿をご依頼申し上げましたところ快くご寄稿頂きましたことに厚くお礼申し上げます。どうか今後とも本校教育の発展に一層のご指導ご支援を賜りますようお願い申し上げます。併せて、本校の限りない発展を心から祈念し発刊の喜びといたします。

思 い 出

第9代校長 大盛哲雄

富野小中学校に発令された時の学校は、自然の豊かな学校、海辺の学校、ノヤシのある学校というイメージでした。

その学校に昭和60年4月に赴任いたしました。児童生徒数、小学校4人、中学校5人のミニ校であります。職員組織は、小学校2人、中学校6人に事務職員、給食婦、用務員、校長ということでした。PTAは正会員4人で、その他地域住民は準会員であります。みんなで築いた学校を守り育てるという母校愛のみなぎった学校であります。

校庭の敷地を利用して、サトウキビを栽培し、PTAの運営資金としました。勿論、正会員・準会員の区別なく全員参加しての作業で、PTAを盛り上げて下さいました。その作業中にハブを2匹捕らえて、早速酒屋へ。堀川さんがその役目を果たしたと報告して、みんなが拍手で喜びました。以上のような雰囲気での学校運営でありました。

おもとトンネルは工事中で、職員の通勤は西廻りで市街地へ行くのが最短距離でありました。おもとトンネルの貫通式、開通式など校長・児童会長・生徒会長が案内を受け、石垣市側からは大本小学校が参加しての式典や祝賀会は歴史的な思い出であり、他校では経験することのできないものだと思います。

さて、その年の修学旅行は生徒5人、職員8人で行いました。隣接校の川平中学校と合同でと考え、交渉したが、前回修学旅行の実施後の反省で、個別で行った方が望ましいとの結論だったようです。やむなく単独で実施することになり、父母にも参加を呼びかけましたが、希望者がなく生徒と職員のみで修学旅行となりました。11月中旬の日程でしたが、紅葉があり全員大喜びでシャッターを切り感動し感激して楽しんでいました。いよいよ、阿蘇山へ！火口へとゴンドラに乗りました。火口付近は吹雪で手先が切ればかりの冷たさ、初めての雪に全員、寒い寒いと震えながら寒さに負けず見学をしました。11月の降雪は滅多にないことだと運転手は話していました。みんな幸運だと喜びました。えびの高原で雪の降りしきる中を、温泉が湯煙を噴き上げていました。そして、宿に着いたら首まで浸っての温泉浴、実にバラエティーに富んだ楽しい旅行でした。

3月には堀川英則君と謝花忍君の2人を中学卒業生として送り出しました。2人とも八重山高等学校に進学しました。その頃から上地一家が石垣に引っ越すことになり、中学生なしということになりました。あの手この手で生徒集めをしましたが、希望者はいるものの住宅がなく諦めざるを得ませんでした。

とうとう中学廃校という悲しい現実になり、中学職員は全員転勤、小学校のみの職員組織になってしまいました。学校が唯一の文化施設であり、地域活性化の源であることを考えたとき、何としても中学校を再開校するまでは、この学校に勤務せねばという決意を新たにしました。

教育委員会は、川平中学校に統合するとのことで地域の合意を求めてきました。しかし、当然のことながら反対されました。そこで、PTA並びに地域住民との話し合いが2、3回続けられましたが、帰宅時の女の子一人のバスでの通学の安全性が問題点として取り上げられました。委員会もそのことには打つ手がなく、再開校という運びになりました。全住民万歳、手を握り涙を流し、互いに抱き合って喜びました。PTA、地域住民の協力と努力の結果、中学校再開校ができ、校長としての責任が果たせたことを今も幸せに思います。私の教員生活の中での最も困難な出来事の1つでした。

45周年を迎えた富野校のいやさかを祈りつつ、感無量この上ない気持ちに浸っています。PTA・地域住民の当時の母校愛に感謝しながら筆を置きます。

待望久しい体育館竣工

第11代校長 玉 城 正 浩

私は、平成6年度から7年度までの2カ年間富野小中学校の第11代校長として勤務しました。石垣市の北西部での勤務は私のたつての希望でしたので、それが叶えられて大変よかったと思っています。

初年度は児童18名、生徒5名職員13名で小規模ながら明るく活気に溢れた学校で、南側は緑豊かな大田山林を前にし、北側は東支那海が広がり県内で最も高く長く長い、於茂登山、底原ダム、於茂登トンネルがあり、栽培漁業・西海区域水産試験場と良い環境に恵まれていました。

しかし、私が赴任したとき最も驚いたのは体育館が無いことでありました。学校はもちろん地域の皆さんにとって必要な施設であり、みんなが待ち望んでいることを知り、教育委員会に問い合わせると今年度の予算に富野校の体育館建設の計画があることを知り、学校、校区民共に喜び、一日も早い完成を待ち望んだのであります。

いよいよ話が具体化してきた時一番問題になったのは建設場所です。校区の人々の意見は西側の窪地を埋めて建設することを強く望んでいました。その理由は運動場が小さくなり百メートルコースが取れなくなることです。もともと運動場の東側は地域の有志の方々が運動場を広くしたいという思いから寄贈したいきさつもあり、そのことを市教育委員会に伝えましたが、校区民の希望する場所では埋め立てるだけでも多くの予算がかかり、到底無理であるとの説明であったので、そのことをPTA側に説明し理解してもらって現在地に決定したのです。

いよいよ、体育館建設も決まりPTAとの話し合いも度々もたれました。話し合いの内容は主に内部にかかる費用です。内部充実には多額の費用が必要であるので内部充実期成会を結成してはとの意見もありましたが、私は地域の負担があまりにも大きいので、そのための期成会を結成するにはためらいがあり、見送ることにしました。そのことを市教育委員会に伝え、ぜひ内部充実にも教育委員会のお力添えをお願いしたところ、当時の教育長の快諾を受け、その問題は解決することができました。

体育館建設用地にはかなりの樹齢のガジュマルの大木があり、そこまで成長するにはかなりの年数がかかり、地域の人々の思いも深いと考え、そのガジュマルを移植して長く保存する必要があると思いました。それで、PTAの方々に相談したところ、その樹木を利用して庭園造成して環境を整えたら、ということにみんなの意見がまとまりました。しかし、庭園造成にはかなりの費用がかかるので校区民、郷友会や知人に協力をお願いして、その浄財で庭園造成の費用に充てることができたのです。

いよいよ、体育館の建設も本格的に進み、請負業者は大進建設が落札しました。体育館と並行して小学校教室の増設（図書室、普通教室、生徒会室）はタモト工業が落札して工事は順調に進み3月に竣工したのです。この機会を記念して大進建設には校旗掲揚ポールを、田本建設には屋上のシンボルマークをお願いしたところ、両業者とも快く引き受けてくださり、このような立派なもののできたのです。その上、校地西側の窪地も幸いPTA会長の砂川孫秀氏が土木業を営んでいる関係で多量の土砂を運び入れて下さり、今のようにきれいに傾斜を整備することができました。

平成7年4月14日に体育館落成・祝賀会実行委員会を結成し5月20日に体育館・校舎増築・庭園造成落成式並びに祝賀会を関係者方々多数をお迎えして盛大に行いました。

私はたった2カ年の勤務でしたが、このような行事を通して校区民ばかりでなく、他地域にいらっしゃる郷友会の皆さんともお付き合いすることができたことは、大変有意義なことだったと思います。

また、この地で児童、生徒職員に恵まれ更に地域の協力によって35年間の教員生活を締めくくることができたことを今もって感謝しています。

この度の創立45周年を記念し、回想記をつづる機会を得ましたことを光栄に思い、感謝しつつ、本校の限りない発展と益々のご繁栄をお祈り致します。

45周年をむかえるまで

6年 立津 舞

校長先生から、富野校の歴史について聞きました。

まず、びっくりしたことは、富野校の児童生徒数が一番多かった時が107人だということでした。今の17人からは考えられないことです。それに、富野校が開校した当時は、7人で、最高人数の107人では、そうとうの違いがあります。へったり増えたりで大変だったのではないかと思います。

最初の富野に住んでいた人たちは、えらいなと思ったことがあります。それは、台風で何度も学校がこわされたけど、それを富野、米原の人ががんばって、何度も校舎を造り直さないであきらめていたら、きっと、今の富野校はなく、45周年もむかえることができなかつたにちがいありません。

また、今までに中学校が、はい校になったこともあったけど、また開校してよかったです。それは、富野小学校だけだと、すごく人数がすくなくなつて、なんにもできないと思ったからです。

50周年をむかえる時までは、富野校がはい校になつてないといいなと思いました。

時代のオアシス

父母 中瀬古 昇

沖縄の本土復帰の翌年、この八重山諸島を旅していて、心に残る風景や出会いがいくつかありました。その中でも特に印象に残っているものの1つが、この富野校のたたずまいでした。旅先での詩情というものを越えた、何かとても強いインパクトを感じたのを今でも覚えています。なんという素朴さ、なんというなつかしさ、想像の中にあるような昔の学舎の風景。圧倒的な静けさと美しさ。

いつしか石垣島に住むようになり、時は流れ、今では自分の子供たちが、毎日元気にこの学校に通っています。子供たちの転入当時、小規模校、そして、複式授業という点に対して、何も心配しませんでした。良きものからは良き香りが漂うが如く、そのものの存在が自然に放つ確かなものを感じ取っていましたから。時代の恩恵もありましょうが、富野校の先生方の布陣も非常にユニークです。八重山地区を初めとして、沖縄本島、内地、外国とさまざまな出身地に加えて、海外での貴重な生活体験や教育体験をお持ちの方もおられます。このような環境のもと、富野校の子供たちは日々の生活の中で、単なる学力のみではない、もっともっと大切な宝物を知らず知らずに受け取っていることと思います。

一般的に先生も生徒もお互いを選ぶことはできません。出会いが全ての一発勝負なのです。先生と生徒の関係で、生徒の胸に一生残るものがあるとすれば、その先生の人格そのものから感受する、人生を生きて行く上での大切な栄養素そのものだと思います。

富野校のグラウンドの芝の下から今でも出てくる石ころを見ますと、便利な機械もない時代から現在に至るまでの学校設立やその後の整備に参加人力された地域の方々や教職員、生徒の皆さんに厚く感謝を申し上げます。そして今の世の中にあつて1つの理想に近い小規模校での教育に日々努力実践をされている現教職員の皆様にも重ねて感謝の意を表します。

